短信
佐藤勢紀子/アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル 16(2024)76-79

和歌を用いた文語文教育
―BUNGO-bun project 第 8 回研究会報告―

佐藤勢紀子

要旨
非日本語母語話者への文語文教育のあり方を探究する BUNGO-bun project の第 8 回研究会を 2024 年 2 月にオンラインで開催した。大学関係者を中心に国内外から 31 名の参加があり、和歌を用いた文語文教育について 2 つの事例報告と討論が行われた。中国の大学での現代の短歌を教材とする授業「日本文語文法」の事例、日本の大学のゼミにおける和歌占い実践の事例が報告され、和歌を身近なものとして読み解くことで学生の文語文学習への意欲が高まり、心の成長が得られることが示された。事後アンケートの回答では、報告事例における創意工夫や楽しく学ぶことを重視する教育方針が高く評価され、プロジェクトの活動が「非母語話者」や「大学」の枠を超えて意義を持つ可能性が示唆された。

キーワード
非日本語母語話者、文語文教育、和歌、歌占い

1. 研究会開催の経緯
1.1 BUNGO-bun project
文語文に関心を持ち学習を希望する非日本語母語話者は、日本研究志望者を中心に世界各地に存在するが、その教育環境は日本国外はもとより国内でも十分に整っているとは言い難い。文語文教育に携わる教師間の連繋も薄く、それぞれが問題を抱えつつ手探りで教えているというのが一般的な状況である。

そうした状況をふまえて、報告者は、非母語話者対象の文語文教育に携わる関係者のネットワークを形成し、情報や知見の共有を通じて教育の質を高め、また教育・研修システムを構築することを目的として、2020年8月にBUNGO-bun projectを立ち上げた。同プロジェクトでは、これまで、2016年度から開発してきたオンライン教材“BUNGO-bun GO!”(1)を公開するとともに、7回の研究会、6回のトークフォーラムを開催し（佐藤他2022、佐藤他2023)、bungonet(2)を通じて関係者間の情報共有、交流の促進を図っている。

1.2 和歌を用いた文語文教育についての研究会の企画
これまで開催した 7 回の研究会では、順に「オンライン化で生じた課題と可能性」、「オンライン教材を考える」、「漢文訓読教育の意義と課題」、「くずし字教育の意義と課題」、「文語文リテラシーの育成」、「近代文語文教育の最前線」、「アクティブ・ラーニングによる文語文教育」というテーマを掲げ、専門家による報告とそれに関する討論を行ってきた。第 4 回までの研究会では、文語文法、漢文訓読、くずし字という文語文教育の三つの柱をとりあげ、第 5 回研究会では、それらの能力を養う総合的な教育・研修システムのあり方について考えた。第 6 回以降の研究会では各論の考察に入り、「近代」(時代)、「アクティブ・

ラーニング」（方法）をテーマとしてきた。

第 8 回研究会では、文語文教育で扱う教材に着目し、和歌を用いた文語文教育というテーマを設定した。和歌、とりわけ短歌や俳句は短く教材として扱いやすいという利点がある。また学習者に人気のある素材であることから、報告者自身、「百人一首」の歌を中心に短歌を主な教材として「古文入門」の授業を行っている（佐藤 2020、pp.24-25）。一方で、伝統的な和歌には特殊な修辞法も多く、入門段階の学習者には難しい点もある。和歌を文語文教育の教材としてとりあげる意味、またその選択方法、指導方法について、先進的な教育事例をもとに討議する機会を作りたいと考え、中国における和歌研究の専門家であり、AI による短歌制作システムの開発で注目されている金中氏と、「歌占い」を用いて斬新な教育活動を展開している中世日本文学研究者の平野多恵氏に事例報告を依頼した。

2.　研究会の概要

2.1　開催日時と参加者

BUNGO-bun project 第 8 回研究会は、2024 年 2 月 10 日（土）21:00～23:00（日本時間）に Zoom によるオンラインで開催された。主催は BUNGO-bun project、共催は東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本語教室である。

開催に先立ち、bungonet、EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）のメーリングリスト、コテキリの会[(3)]等を通じてプログラムを周知した。研究会の参加者は 31 名で、その内訳は、母語別では日本語 26 名、日本語以外 5 名、身分別では大学教員 15 名、元大学教員 4 名、大学非常勤教員 5 名、大学院生 1 名、その他 6 名であった[(4)]。他に、時差により研究会に参加できなかった録画視聴者（非母語話者、大学教員）が 1 名いた。

2.2　プログラム

第 8 回研究会のプログラムは以下のとおりである。

第 1 部　事例報告―和歌を用いた文語文教育

報告 1　金中（西安交通大学）「日本語文語教育における現代短歌の応用」

報告 2　平野多恵（成蹊大学）「文語文教育における〈おみくじ・占い〉の可能性―自分のために和歌を読み解く」

第 2 部　ディスカッション・情報交換

2.3　報告と討論の内容

ここでは、事例報告およびそれに続く討論の内容をごく簡単に紹介する。

報告 1 は、金中氏の担当授業「日本文語文法」の実践報告であった[(5)]。文語文を難しいと感じる学生の関心を引き、学習意欲を高め、学習内容を長く記憶に残すために、現代短歌を朗読・暗記させ、その解説として文法項目を教えていることが報告され、教材としている吉井勇、塚本邦雄、俵万智、横山未来子ら現代の歌人の作品が紹介された。学生が楽しく感じることがその精神の成長に役立ち、最も重要であるという見解が示された。

平野氏による報告 2 では、まず、学園祭等における和歌占い実践、和歌みくじの制作を中心とするこれまでの教育活動が報告され、JapanKnowledge『新編国歌大観』公開との共同企画として 2018 年に開設された Web サイト「開運☆せいめい歌占」[(6)]が紹介された。さ

らに、平野ゼミのゼミ生による「せいめい歌占」を利用した「もっと開運アドバイス」の活動でどのように占いの古歌を読み解くのかが語られ、その教育効果が論じられた。

第 2 部では、約 1 時間にわたり、報告者との質疑応答を中心に討論が行われ、報告者を含め 9 名の参加者からの発言があった。主な論点になったのは、和歌を暗唱させることの意義、研究者養成目的のタイトな教育課程で和歌や歌占いなど楽しむための要素を取り入れる方法、短歌創作における文語使用の効果、歌占いで学生にカウンセリングをさせる上での配慮、占い体験による心の成長という学習効果、占いを教育に持ち込むことの是非などであった。議論の中で、今回の報告内容は現代とのつながりを重要視するようになった高等学校の古典教育にも応用できるのではないかという発言があった。

3. アンケートの結果

3.1 事後アンケートの実施

研究会終了後に、参加者および録画視聴者を対象に Google フォームによるアンケートを無記名で実施した。質問として、1)母語（日本語／他）、2)身分、3)満足度、4)今回の研究会で特に印象的だったこと、5)・6)各報告についてのコメント、7)今回の研究会や BUNGO-bun project についての感想・意見、の 7 項目を設け、1)～4)の回答を必須とした。提出期限までに 23 名（母語話者 19 名、非母語話者 4 名）からの回答があった。

3.2 アンケートの回答

まず、質問 3)の研究会への満足度については、回答者全員が「1」(満足できなかった)～「10」(とても満足した）の中で「7」以上を選択した。そのうち「9」もしくは「10」を選んだ特に満足度の高い回答者は 19 名で 82.6%を占めていた。

次に、質問 4)への回答に示された、印象的だったことの一端を紹介する。実践報告については、(学習者の興味や学習意欲を喚起する）それぞれの創意工夫が印象的であるという趣旨のコメントが 5 名から、また、楽しく学ぶことを重視する教育方針に注目したコメントが 4 名から寄せられた。討論については、「理解が深まる有益な質問やコメントが印象に残って」いる、「諸先生方の質問によって……議論が深められてゆき、とてもよい会」だった、などのコメントが見られた。一方で、初めての参加者からは、一般的な日本語学習者に文語文をどのような目的で教えるか、どのように、どの程度教えるのがよいかが今回の報告と討論からは捉えきれなかったという指摘もあった。

研究会やプロジェクト全体についての感想・意見を求める質問 7)への回答では、「刺激的」、「有意義」、「勉強になった」、「楽しかった」などの短評のほか、次のようなコメントも見られ、BUNGO-bun project が「非母語話者」や「大学」という枠を超えて有用な知見を提供しうるものとなる可能性が示唆された。

- 現代を生きる者の思いを伝えるのにも、文語は有用です。……文語を楽しく学ぶ方法があれば助かるのは「非母語話者」だけではないと思います。
- 高校の現場にも日本語を母語としない生徒がおりますし、今後は増えてくると感じています。そうした中で本プロジェクトは大学のみに止まらない価値を持っていると思います。

また、研究会の運営について、多様な企画があること、開催時間を海外（今回はヨーロッ

パ）に合わせていること、質疑の時間が十分に取られていて様々な意見が聞けることなどを評価するコメントも見られた。

4. 今後の活動に向けて

以上、「和歌を用いた文語文教育」というテーマで開催した BUNGO-bun project 第 8 回研究会について、その概要と事後アンケートの結果を報告した。今回の研究会での 2 つの事例報告は、教材として和歌を取り上げている点だけでなく、現代社会に生きる学生の関心を引く素材を用いて楽しみながら文語文を学ぶ機会を提供し、またその学習活動を通じて学生の心の成長が促されているという点においても共通していた。古語や文語文法を過去のものとして捉えるのではなく、現代にも生き続けるものとして捉えることで、文語文教育の新たな可能性が見えてくるように思われる。今後も BUNGO-bun project の活動を通じて、そのような視点からの議論を重ねていきたい。

（佐藤勢紀子さとうせきこ・東北大学・sekiko.sato.e8@tohoku.ac.jp）

付記

本報告の研究会の開催は、科学研究費助成事業基盤研究(C)20K00720「非母語話者の文語文学習支援のためのシラバス・教授法開発および研修システムの構築」（2020 年度～2022 年度、2023 年度まで延長、研究代表者：佐藤勢紀子）の助成によるものである。

注

1. ＜https://bungobungo.jp/＞
2. 非母語話者を対象とする文語文教育の関係者のメーリングリスト。2024 年 2 月末時点の登録者は 124 名となっている。
3. 同志社大学古典教材開発研究センター「古典教材の未来を切り開く!研究会」の略称。
4. その他の参加者の内訳は、高校教員 1 名、各種学校等講師 4 名、大学職員 1 名。国別では日本、中国、スロベニア、イギリス、アメリカ合衆国の 5 カ国から参加があった。
5. 詳細については金（2009）を参照されたい。
6. ＜https://ssl.japanknowledge.jp/utaura/＞（2024 年 2 月 29 日閲覧）

参考文献

金中（2009）「中国における日本語文語授業の工夫―現代短歌と抒情歌の導入―」『東京外国語大学日本研究教育年報』13，97-101.

佐藤勢紀子（2020）「留学生を対象とする文語文入門の授業―日本文化演習「古文入門」実践報告―」『東北大学言語・文化教育センター年報』5，22-30.

佐藤勢紀子・虫明美喜（2022）「日本語非母語話者への文語文教育を語る―トークフォーラム「かだらいん」（第 1 回～第 3 回）実践報告―」『東北大学言語・文化教育センター年報』8，1-9.

佐藤勢紀子・虫明美喜（2023）「アクティブ・ラーニングを取り入れた文語文教育―BUNGO-bun project 第 7 回研究会報告―」『東北大学言語・文化教育センター年報』9，17-25.